

北周趙王の文學と庾信の影響

— 聖武天皇宸翰『雜集』所收「周趙王集」に基づいて —

安藤 信廣

はじめに

梁の承聖三年（五五四）、庾信（子山。五一三—五八一）が使節として北朝に入り、そのまま歸國できずに北地で文學活動をする事になったのは、文學の範圍に限っても、文化史的な意味においても、大きな事件だった。しかし、庾信の宮廷詩が北朝において歓迎されたことは自明であるとしても、強いられた生存を生きる心中の葛藤や、それを表出する文學が北朝の士人に受け入れられたのかどうか、庾信の思想や彼のせおっていた南朝の文化がどのように受けとめられたのか、それらの問題は明瞭になってはいない。

本稿は、北朝文學・文化に對する庾信の影響の實態を、右のような問題點に即して具體的に追究しようとする試みである。とはいえ、北朝の文學・文化の全體を見わたした考察ではない。庾信の影響を最初に、直接に受けたことが確實ではあるが、その調査の可能性が失われていた、北周の趙王宇文招（五四五？—五八〇）の文章の調査と検討である。

宇文招の文章は詩一首を除いて全てが散逸してしまい、中國本土に

北周趙王の文學と庾信の影響

は残されていない。庾信の影響を確かめることは、従って不可能だった。しかし、その影響をうかがうことのできる資料が、わが國に傳存している。奈良正倉院に傳わる聖武天皇宸翰『雜集』所收の「周趙王集」が、それである。

この聖武天皇宸翰『雜集』については、内藤湖南の報告¹⁾以來すでに多くの調査・論考がある。本稿は、それらのなかでも特に、小野勝年『宸翰雜集』所收「周趙王集」釋義（一）（二）²⁾と、合田時江『聖武天皇『雜集』漢字總索引』に多くを負い、先學の業績に基いて『雜集』所收「周趙王集」を庾信との關係という視點から調査したものである。

一

梁の元帝の命を受けた庾信は、承聖三年、外交使節として西魏に入った。その直後、西魏は梁に侵攻して梁都江陵を攻めおとし、結果として庾信は歸國できなくなった。

庾信が西魏に入ったとき、彼はすでに四十二歳だった。西魏の實力者で死後に北周の太祖とされる宇文泰は庾信を厚遇し、そのため庾信は宇文泰の子弟の、事實上の文學の師となった。³⁾宇文泰の男子たちは、

宇文毓（北周明帝）が二十一歳だったのを除けば、宇文覺（閔帝）、宇文邕（武帝）、宇文憲（齊王）らはわずかに十歳をこえていたに過ぎず、その弟である趙王宇文招、滕王宇文述らは、十代にようやく達するくらいの年齢だったと考えられる。

趙王招は、若くして北周王朝の柱石となり、その兄弟たちとともに對北齊戰爭では最前線に立って華北統一をなしとげたが、楊堅（隋高祖・文帝）の篡奪を阻もうとして成らず、族滅された。他方で彼は文學を好み、深く庾信からの文學的影響を受けた。そのことは『周書』趙王傳に明瞭に伝えられている。

趙僭王招、字は豆盧突。幼くして聰穎、群書を博渉し、好んで文を屬る。庾信の體を學び、詞に輕豔多し。（中略）招著はす所の文集十卷、世に行はる。

趙王が「庾信體」（庾信の體）を學んで「輕豔」の詩を多作したことは、こうして確かに推測できる。だが、それが彼の詩文全體の特徴だったかどうかということまでは、「文集十卷」と史書に記録された彼の作品が散逸してしまったために確かめようがなかった。

一一

趙王招の文學について考えるてがかりとなるのが、聖武天皇辰輪『雜集』中に収録された「周趙王集」である。同『雜集』は佛教に關連のある中國六朝・唐代の詩文を集めたものであり、収録されている作品数はあわせて百四十五編にのぼる。卷末に「天平三年九月八日寫了」とあることから、天平三年（七三二）、聖武天皇三十一才の秋に筆寫されたことが確實に分かる。

この『雜集』のなかに、「周趙王集」と總題を付けられた文章群が

ある。これが北周趙王宇文招の「文集十卷」の一部と考えられる。「周趙王集」には、趙王招の文章七首（うち一首は四編からなっていると考えられるので十編と數えることとする）が書寫されている。言うまでもなく趙王招の文學と思想を考えるうえで唯一の貴重な資料である。

「周趙王集」に收められている文章は、次の十編である。（作品名の上の數字は、合田時江編『聖武天皇「雜集」漢字總索引』に付された作品番號。一一二番に屬する四篇には假題を付けて a、b、c、d の下位符號を論者が付した。）

- 一一一 道會寺碑文
- 一一二 平常貴勝唱禮文 a 法身凝湛 b 因果冥符 c 無常一理 d 五陰虛假
- 一一三 無常臨殯序
- 一一四 宿集序
- 一一五 中夜序
- 一一六 藥師齋序
- 一一七 兒生三日滿月序

この十編のうち、一一一「道會寺碑文」は、「周趙王集」だけでなく『雜集』全體を通じて最長の作品であり、庾信からの文學的影響を顯著に示していると考えられる。本稿は、この「道會寺碑文」を中心に調査し、他の文章についても考察するものとした。

一二

本節では、「周趙王集」の文章と庾信の文章とを比較し、兩者の中で一致または類似する語彙を示し分析する。但し、その全ての例を示

すことは不可能でもあり、また意味が薄いと思われるので、多少とも影響關係が推測できる語に限定する。まず「周趙王集」一一一番「道會寺碑文」中の特徴的な語彙を示し、それに對して影響を與えた可能性のある庾信の語彙を例示する。「A」は全て「周趙王集」の例を指し、「B」は全て『庾子山集』の例を指す。本節では、「A」は全て「道會寺碑文」からの引用なので、出典は「趙王一一一」のように示すが、次節以後において「道會寺碑文」以外の趙王の作をとりあげられる場合も同様とする。従って「趙王一一二d」とあれば、「周趙王集」一一二番「平常貴勝唱禮文」のd「五陰虛假」ということである。なお、引用文は句の構造を明示するため、韻文・散文を問わず、一句毎に改行して表示し、訓讀を付した。

(1) 「凝陰」

- A 若夫九成圓蓋 夫の九成の圓蓋の若きは
 則康陽垂日 則ち康陽日を垂れ
 四柱方輿 四柱の方輿は
 則凝陰戴升 則ち凝陰戴升す (趙王一一一)
 B 觀夫造作權輿 夫の權輿を造作するを觀るに
 皇王厥初 皇王厥れ初む
 法凝陰於厚德 凝陰に厚德に法り
 仰沖氣於清虛 沖氣を清虛に仰ぐ (庾信「象戲賦」)
- (2) 「測量」
- A 毛滴海水 毛もて海水を滴らすは
 算數之理無方 算數の理方ぶる無し
 塵折〔析〕須彌 塵もて須彌を析するは
 測量之情逾遠 測量の情逾々遠し (趙王一一一)

北周趙王の文學と庾信の影響

(3) 「銀甕」

- B 嘉石肺石 嘉石・肺石
 無以測量 以て測量する無く
 舌端筆端 舌端・筆端
 惟知繁擁 惟だ繁擁を知る (庾信「答趙王啓」)
- A 至如玉盤銀甕之祥 玉盤銀甕の祥
 赤獸白禽之瑞 赤獸白禽の瑞の如きに至りては (趙王一一一)
- B 銀釜金船 銀釜と金船と
 山車澤馬 山車と澤馬と (庾信「三月三日華林園馬射賦序」)

(4) 「雙苗・三脊」

- A 雙苗三脊 雙苗三脊
 以表至孝之徵 以て至孝の徵を表す (趙王一一一)
 B 嘉苗雙合穎 嘉苗雙びて穎を合し
 熟稻再合胎 熟稻再び胎を含む (庾信「和李司錄喜雨」)
- B' 北里之禾六穗 北里の禾は六穗
 江淮之茅三脊 江淮の茅は三脊 (庾信「羽調曲」其四)
- (5) 「雙龍・葛陂」
- A 河漢雙龍 河漢の雙龍
 朝遊葛陂之水 朝に葛陂の水に遊ぶ (趙王一一一)
 B 迎仙客於錦市 仙客を錦市に迎へ
 送游龍於葛陂 游龍を葛陂に送る (庾信「竹杖賦」)
- (6) 「金繩・銀函」
- A 若乃金繩玉字之書 乃ち金繩玉字の書

石架銀函の部の若きは (趙王一一一)

B 可以玉檢封禪 玉檢を以て封禪すべく

可以金繩探策 金繩を以て策を探すべし (庾信「羽調曲」)

其四)

B' 雖復銀函東度 復た銀函東に度り

金燧南翻 金燧南に翻すと雖も (庾信「陝州弘農郡五張寺經藏碑」)

(7) 「驚猿・落雁」

A 中臂礙柱之精 臂に中て柱を礙つるの精あり

驚猿落雁之巧 猿を驚かしめ雁を落とすの巧あり (趙王一一一)

B 莫不飲羽銜竿 羽を飲み竿を銜み

吟猿落雁 猿を吟せしめ雁を落とさざる莫し (庾信「三月三日華林園馬射賦序」)

(8) 「垂露・銀鉤」

A 緣情則飛雲玉髓 情に緣ひては則ち飛雲玉髓

落紙則垂露銀鉤 紙に落ちては則ち垂露銀鉤 (趙王一一一)

B 文異水而湧泉 文は水に異なりて泉湧き

筆非秋而垂露 筆は秋に非ずして露を垂る (庾信「謝趙王示新詩啓」)

B' 銀鉤永固 銀鉤永く固く

金牒長存 金牒長く存す (庾信「陝州弘農郡五張寺經藏碑」)

(9) 「藥性・九轉」

A 白石紫芝 白石紫芝

懸諸藥姓 懸かに藥性を諳んじ

四童九轉して 四童九轉して

遙識方名 遙かに方名を識る (趙王一一一)

B 問葛洪之藥性 葛洪の藥性を問ひ

訪京房之卜林 京房の卜林を訪ふ (庾信「小園賦」)

B' 蒲桃一杯千日醉 蒲桃一杯千日酔ひ

無事九轉學神仙 九轉して神仙を學ぶを事とする無し (庾信「燕歌行」)

(10) 「瑠璃・瑪瑙」

A 月映瑠璃 月は瑠璃に映じ

帶春風而不墮 春風を帯びて墮ちず

雲連馬腦 雲は瑪瑙に連なり

似秋雨而將垂 秋雨に似て將に垂れんとす (趙王一一一)

B 銜雲酒杯赤瑪瑙 雲を銜む酒杯は赤き瑪瑙

照日食螺紫琉璃 日に照らさるる食螺は紫の琉璃 (庾信「楊柳歌」)

(11) 「空香」

A 空香自吐 空香自ら吐いて

無勞荀彧之衣 荀彧の衣を勞する無し (趙王一一一)

B 靈駕千尋上 靈駕千尋を上り

空香萬里間 空香萬里に間こゆ (庾信「道士步虛詞」其八)

(12) 「慧燈」

A 慧燈暫照 慧燈暫く照らして

暗空方明 暗空方に明らかなり (趙王一一一)

B 願憑甘露入 願はくは甘露に憑りて入り

方假慧燈輝 方に慧燈の輝きを假らん (庾信「仰和何僕射」)

(2)「測量」は、庾信以前に使用例が無いわけではないが、多用されている語ではない。少くとも『文選』には一度もあらわれない。趙王がこの語を用いるにあたって意識したのは、やはり庾信Bの「嘉石肺石、無以測量」(嘉石・肺石、以て測量する無し)という表現だっただろう。庾信のこの文章の「答趙王啓」という題名から、趙王がこの文章を讀んでいたことは確實だから、影響関係の確實性も高い。

また(1)「凝陰」の例では、「凝陰」という一語が一致しているだけでなく、その語を用いる文脈自体が近似している。趙王Aは「若夫九成圓蓋」(夫の九成の圓蓋の若きは)で始まる全文冒頭の部分にこの語を用い、天地のありかたを語る原理論的な表現として用いている。「道會寺碑文」は、王巾の「頭陀寺碑文」(『文選』卷五十九)を意識していると見られるが、それ以上に庾信の諸文章に注意している。この冒頭は庾信Bの「觀夫造作權輿」(夫の權輿を造作するを觀るに)で始まる「象戲賦」の冒頭を學んでいる。

(5)「花然」は、趙王が庾信の表現に學んだことを示す顯著な例と言える。庾信Bの題名「奉和趙王隱士」から、趙王がこの詩を見ていることは明らかである。庾信Bの「山花焰火然」(山花は焰火のごとく然ゆ)は、杜甫「絕句」の「山青花欲燃」(山青くして花燃えんと欲す)の典據としてしばしば引かれるが、趙王Aの「花然寶樹」(花は寶樹に然ゆ)は、杜甫より二百年前に、庾信の表現を學んだ例と言えよう。

單語一語を庾信と共有する例は、この他にも多數ある。「道會寺碑文」以外の作品の中から特徴的なもののみを例示する。

(7)「玉葉」

A 大慈雲起

大慈雲と起こるは

等玉葉之重舒 玉葉の重なり舒がるに等し (趙王一一二a)
B 雲玉葉而五色 雲は玉葉のごとくにして五色に
月金波而兩輪 月は金波とともにして兩輪たり (庾信「羽調曲」其三)

趙王Aは、佛の慈悲が雲のようにわきおこるさまを、花木の美しい葉「玉葉」のひろがりにととえている。それを六言句に配する表現は、直接には庾信B等から來ているだろう。

(8)「白燕」

A 官途隆顯 官途の隆顯するは

非因白燕之祥 白燕の祥に因るに非ず (趙王一一二c)

B 宮觀不移 宮觀移らず

故無勞於白燕 故に白燕を勞する無し (庾信「三月三日華林園馬射賦序」)

趙王Aは、瑞祥である「白燕」を必要としない、という文脈でこの語を用いており、その上、四言句―六言句という構成の六言句の方にこの語を配置している。そしてそれはそのまま庾信Bの文脈であり、構成である。

以上によって、單語一語のレベルで、趙王招が庾信の表現を學んでいたことは證明できたと考えられる。また單に單語を借用したというだけではなく、文脈をふまえて庾信の語彙を用いている例が多いことも、見てとることができる。

2 單語一語以上の類似性

趙王招の文章中には、庾信の語彙を二語以上、近接して用いている例がいくつかある。(4)(5)(6)(7)(8)(9)(10)(13)(16)などが、それである。

(7)の「驚猿・落雁」は弓のたくみさを言う語である。「驚猿」は、

『淮南子』に、「落雁」は『戰國策』に、それぞれ出典を持つが、別箇に引かれたのではない。兩方をむすびあわせて一句をかたちづくる趙王Aは、庾信Bの例を學んだものである。つまり、趙王は、典故の用い方やその配置のしかたまで、庾信に學ぶところがあつたのである。

(8) 「垂露・銀鉤」は、それ自體としては、庾信の別個の文章中の語彙をよせあつめたものすぎない。ただ少くとも「垂露」は、明らかに庾信Bの「筆非秋而垂露」(筆は秋に非ずして露を垂る)によつてゐる。注意すべきは、これも庾信が趙王に送つた文章の一つ「謝趙王示新詩啓」の中の表現だといふ點である。

(16)の「窗疎・檐迴」の例は、もっともよく、趙王が庾信の文體を學ぼうとしたことを示すものと言えるだろう。趙王Aの表現は、視界のひらけた窓の外にいなすまがはしり、たかい檐に風が吹きよせる動的な瞬間を構成している。對して、その表現のものになつたにちがいない庾信Bは、きわめて直感的な句で、また多義的である。「山危檐迴」は、「簷がたかい」ことを示しながら、山が「簷よりはるかに遠い」ことをもイメージさせる。「葉落窗疏」は、「窓からのながめがからりととおる」ことを示しながら、葉が「窓邊にまばらになつた」ことをも意味する。庾信の中でも、こうした對句の構成は特異なものであり、それだけ庾信が注意して組み立てた表現だと言える。それをうけつぎながら、なおかつその靜かな繪畫の世界から歩み出て、趙王は動的な對句を構成している。そこに趙王の獨自の工夫が、片鱗とはいへ、見える。

(13)「六龍・四校」の例では、趙王Aが庾信Bのイメージをそのまま下地にとりこんでゐる。そこに趙王の修辭的配慮を見なくてはならぬ。なお、四部叢刊本『庾信集』は、「四校」を「四圍」としてゐる。

のだが、「四校」とする倪璠注『庾子山集』の方が良いことを、趙王Aが證明する結果となつてゐる。

二語を一致させる例は他にもあるが、次の二例のみを示す。

(19)「陽鳥・陰菟」

A 所以日輪曉映 所以に日輪曉に映じては

陽鳥之羽不停 陽鳥の羽停まらず

月桂夕懸 月桂夕べに懸りては

陰菟之光恆徒 陰菟の光恆に徒る (趙王一一二c)

B 陰兔假道 陰兔道を假り

陽鳥迴翼 陽鳥翼を迴らす (庾信「秦州天水郡麥積崖佛龕銘」)

(20)「法鼓・泗濱」

A 法鼓初鳴 法鼓初めて鳴り

浮泗濱之響 泗濱の響きを浮かぶ (趙王一一四)

B 雷乘法鼓 雷は法鼓に乗じ

樹積天香 樹は天香を積む (庾信「秦州天水郡麥積崖佛龕銘」)

B' 泗濱石 泗濱の石

龍門桐 龍門の桐 (庾信「青帝雲門舞」)

(19)B、(20)Bは、庾信の「秦州天水郡麥積崖佛龕銘」の中の語彙であり、趙王招がことに注目した作品の一つだった可能性を示す。

以上、二語以上の庾信の語彙を利用したと見られる例からは、修辭のレベルでの影響までが見えてくる。趙王が「庾信體」を學んだという史書の記述を、以上の例によつて具體的に裏付けることができるのである。

3 趙王に影響をあたえた庾信の作品の性格

趙王が利用した庾信の語彙は、庾信の公的作品に含まれるものが多
い。公的作品とは、公的な場で發表することを意圖して作られた作品
という意味であるが、具體的には、「三月三日華林園馬射賦」「象戲賦」
など宮廷・國家の行事や儀禮に關わるもの、「陝州弘農郡五張寺經藏
碑」「道士步虛詞」など道佛の行事や記録に關わるもの、あるいはま
た王族・貴顯の墓誌等である。

趙王招が庾信の公的作品から影響を受けたことは、當然の歸結と言
わなければならぬ。庾信と趙王との關係は、何よりもまず宮廷詩人
と皇族との關係にほかならぬ。公人としての趙王が、庾信の公的作
品の表現に注目し、そこに大きな意義を認めたことは當然である。こ
とに、庾信の佛教關係の文章に注意をはらっていたことは、さきに見
た例から明らかだろう。趙王は「一一二」平常貴勝唱禮文」の a 「法身
凝湛」において「識洞三明明」(識は三明明を貫く)と言ひ、b 「因果冥
符」において「觀音極地」(觀音の極地)と言ひ、それはどちらも
庾信「陝州弘農郡五張寺經藏碑」の一句「三明明極地」(三明明の極地)
という表現を分解して利用した形になっている。

さらに、もともと佛教用語ではないものを、佛教的文脈に轉用した
例もある。

(2) 「洪基」

- A 自非久脩善業 久しく善業を脩め
多樹洪基。 多く洪基を樹つるに非ざるよりは
豈得子弟莊嚴 豈に子弟の莊嚴し
親理成就。 親理の成就するを得んや (趙王一一七)
B 周之文武洪基。 周の文武の洪基は

光宅天下文思 天下の文思を光宅す (庾信「羽調曲」其一)

庾信 B は「洪基」の語を、本來の文脈で用いている。「洪基」は、
王朝の洪業の基礎を意味する。對して趙王 A は、これを佛教的な文脈
に置き、洪大な福の基礎という意味で用いている。趙王はこの他に「
一一二」でも、「今日施主、樹此洪基」(今日施主、此の洪基を樹つ)と、
② A と全く同じ用い方をしている。庾信が表現した王朝の「洪基」を、
趙王は佛教の「洪基」に轉用した、と言うことができる。雄偉な規模
をもつ公的儀禮の用語や華麗な宮廷詩の語彙などを、趙王は庾信の公
的作品を介して學び、それを自己の文章に様々な形で利用したことが
分かるのである。「雜集」中の「周趙王集」が全く佛教關係の文章で
ありながら雄大な氣風を示すのは、もとより王族としての趙王その人
の人格によるだろうが、庾信の公的表現に學んだことも理由の一端と
なるだろう。

他方、趙王が庾信の内面的煩悶を示す作品に學んだことを示す例も、
少いとはいへ存在している。さきの例の中では、(5)(9)などがそれにあ
たり、趙王をはじめとする特定の個人への贈答詩文の一部を強いて數
えるとしても、(2)(5)などを加えられるにすぎないが、庾信の重い煩悶
を趙王がともかくも理解し受けとめていたことを示している。

見やすいのは、(2)「測量」の例である。趙王 A は少くとも庾信 B
「答趙王啓」の用例を認知した上で表現している。ところで「答趙王
啓」は、出征した趙王からの書信への返信とみられ、自分が「不學無
術」であるにもかかわらず高位(司憲中大夫)に登用されていること
を述べ、その上で、年老いて役に立たなくなつたことを言う。「但年
髮已秋、性靈久竭。嘉石肺石、以無測量、舌端筆端、惟知繁擁」(但
だ年髮已に秋となり、性靈久しく竭く。嘉石・肺石、以て測量する無

く、舌端筆端、惟だ繁擁を知る。) 年老いたために私は「性靈」(心のはたらき) が盡きはててしまい、訴訟のときに嘉石・肺石で「測量」(人の心をはかる) することもなく、訴訟の辯論を聞いたり訴状を見たりしても、わずらわしい思いがつのるばかり。こう述べる庾信のことばづかいは諧謔の氣味をただよわせているが、本質的に暗い。嘉石でも肺石でも「測量」できないのは、訴訟者たちの心中であると同時に自分の心中である。舌端や筆端に感じてしまう「繁擁」は、訴訟者たちの心のわずらわしさであるが、自分の心のわずらわしさでもある。諧謔の氣味を介して、「性靈」の盡きた自分への苦い認識が語られている。

「性靈」という語を庾信は多用した。そしてその「性靈」は多くの場合、傷ついたり、盡きはてている。「擬連珠」其二三は、こう言う。「蓋聞性靈屈折、鬱抑不揚、乍感無情、或傷悲類」(蓋し聞く性靈屈折し、鬱抑して揚がらざれば、乍ち無情を感じ、或いは非類を傷む)。「性靈」がくじけ、心が「鬱抑」されてしまうと、人はふいに自己が「無情」であることを感じてしまい、あるいは自己が「非類」であることを傷む。こうした知覚は、単に痛々しいというだけでなく、安定した自己認識を打ちこわしてしまふものである。自己が「非類」であるという認識は、自己が人聞でない、ひいて自己でないということであり、それは通常成立している認識に大きな裂け目を生じてしまう。認識の裏に廣がる闇の領域が露出してしまふのだ。「擬連珠」其二三で用いられている「性靈屈折」という表現をふまえて見なおすなら、「謝趙王啓」の「性靈久竭」という表現も、諧謔の奥にただならぬ重さをもつことが分かる。人の心を「測量」できないという徒勞感、烏澣の口ぶりであるにもかかわらず、實はそのことによって逆

に深いのである。趙王が「塵析須彌、測量之情逾遠」と言うとき、そうした「測量」の徒勞をいう庾信「謝趙王啓」の語感をひききいいでいる。

(5)「雙龍・葛陵」の例は、『後漢書』方術傳の費長房のものがたりに基いている。だが表現の様相から見ると、費長房のものがたりを直接下敷きにしたのではなく、庾信B「竹杖賦」を明らかにふまえている。

しかしこの「竹杖賦」は、庾信が西魏、北周王朝への出仕を拒絶する思いを描いた作品である。作中では、荊州を平定した「桓宣武」が年老いた「楚丘先生」に出仕を求めて杖を贈ろうとするが、先生はそれを拒み通す。「桓宣武」が梁都攻略を命じた宇文泰の分身であり、「楚丘先生」が庾信の分身であることは明瞭に分かる。趙王は費長房の故事を瑞兆としてとり出すために、「竹杖賦」の表現を作品全體の文脈とは無關係に斷章取義的に利用したのであろう。だがそのために、趙王は「竹杖賦」の文脈を理解していなければならない。

右のほかにも、「周趙王集」には庾信の内面的煩悶を示す私的作品群の語彙と一致するものが見られる。

(2)「芬芳」

A 如梅檀之團遶 梅檀の團遶するが如く

譬蘭桂之芬芳 蘭桂の芬芳あるに譬ふ (趙王一一七)

B 五步之内 五步の内

芬芳可錄 芬芳錄すべし (庾信「擬連珠」其三一)

(2)「霜露」

A 霜露薄愆 霜露の薄愆は

因惠日而消蕩 惠日に因りて消蕩せられん (趙王一一二c)

B 或低垂於霜露 或いは霜露に低垂し

或撼頓於風烟 或いは風烟に撼頓す (庾信「枯樹賦」)

B' 駸駸霜露 駸駸たる霜露

君子先危 君子先んじて危し (庾信「思舊銘」)

庾信には「霜露」の用例が十四例もある。その多数の用例の基本的な色調は、B「枯樹賦」、B'「思舊銘」と同じである。B'は、『禮記』祭義篇の「霜露既降、君子履之必有悽愴之心」(霜露既に降る、君子これを履めば必ず悽愴の心有り)をふまえていると見られるが、「霜露」の語のなかにことさらに「悽愴」の感をかかえこんでいるところに、庾信の特徴がある。趙王Aは、そうした語感をひきつぎながら、「惠日」にたとえられる佛のめぐみによって「霜露薄愆」が消えることを祈願しているのである。

とはいえ、『雜集』所收「周趙王集」には、庾信の内面の煩悶を受けとめたと見られる表現は、多くない。「周趙王集」の十編がどこまでも佛敎の眞理を語る文章である以上、それはやむをえない。庾信の個の内面を表現する作品は、佛理に収まらない、あるいは佛理と接點を持ち得ない煩悶を語っている。趙王にとって佛理はテーマであり結論であったが、庾信にとってはそれは前提だったのである。

五

前節で見た通り、「周趙王集」は庾信の文學的影響の深さと多面性を示している。と同時に「周趙王集」は、庾信の影響を、文學をこえた文化的な視點で考えることも可能にした。言うまでもなく、その中心は佛敎思想の側面である。

庾信が佛敎に對する理解を持っていたことは、まちがいない。在梁時代の「奉和同泰寺浮屠」詩、北周時代の「秦州天水郡麥積崖佛龕銘」

「陝州弘農郡五張寺經藏碑」等の作は庾信の佛敎に對する知識の深さを示している。とはいえそれらは知識の深さを示しながら、どこまでも言葉に執っていて、信仰の深さを示しているとは必ずしも言えない。だが、個人の自己認識の範圍をこえて、彼のせおっている文化が他者に影響を與えることはある。庾信のせおってきた南朝の文化が、庾信の自意識をこえて趙王招に影響をあたえた過程を「周趙王集」に見ることができ、一例を挙げる。

「道會寺碑文」の五十三行目以後は、道會寺に皇帝が行幸し、佛敎について講説をする場面である。ところが五十六行目「然後」から五十九行目「在忘相」までは、途中に本文の混亂があると考えられ、そのため先學の句讀・訓讀ともに安定していない。小野氏前掲書は次のように句讀を切る。

然後登寶座。撫金机。潛名敎。闡大乘法勝。毘日雲義。均廢疾。呵梨成實。事等膏。

これを見ると、前半は「闡大乘」で一度切るべきであると思われる。問題は、その後の「法勝毘日雲義均廢疾呵梨成實事等膏」十六文字の讀み方である。この十六文字を見直すと、後半の「呵梨成實、事等膏」(呵梨の成實は、事膏に等し)の七文字は、ひとまず安定していることが分かる。「呵梨」は小野氏が注記している通り人名で、中インドの人、呵梨跋摩。「成實」は、その人の著作『成實論』を指す。その「呵梨成實、事等膏」の「事等」(事等し)という句形は、前半の「義均」(義均し)に對應していることが分かる。そこで前半の九文字「法勝毘日雲義均廢疾」は、ひとまず「法勝毘日雲、義均廢疾」(法勝毘日雲、義廢疾に均し)と讀むことができる。

しかもこのような行文には、先例がある。ことに梁の簡文帝蕭綱は

これを多用している。

事等棄琴 事は琴を棄つるに等しく

理均放鄭 理は鄭を放つに均し (蕭綱「昭明太子集序」)

則事等觀香 則ち事は觀香に等しく

義同錫乘 義は錫乘に同し (蕭綱「爲人作造寺疏」)

この他にも多數の例が見られる。このことから、趙王招は、簡文帝の文章表現をも學んでいたことが推測できる。ともあれ、解讀の困難だった十六文字は、「法勝毘日雲」の五文字を残して一應の解讀が可能となった。

「法勝毘日雲」の「法勝」に、小野氏は「もつとも優れた佛法の義」と注しておられるが、後半の「呵梨」と對應するので人名としなくてはならない。その上で、最大の問題は「毘日雲」三文字の解釋ということになる。この「毘日雲」三文字は、實は、「毘曇」の誤寫ではないだろうか。「曇」の一字を、轉寫の過程で「日雲」の二文字に書き誤ったのではないか。聖武天皇その人によるものか、あるいはそれ以前に起きていたのか、それは分からない。しかし「毘日雲」を「毘曇」とすれば、當該五文字は「法勝毘曇」という整った四字句となり、「呵梨成實」ときちんとした對應をする。「法勝毘曇」は、法勝(優婆扇多)の著した小乗の論理學書『阿毘曇心論』を指すことになる。以上の考察に基いてこの箇所を讀解するなら、次のようになる。

法勝毘曇 法勝の毘曇は

義均廢疾 義廢疾に均しく

呵梨成實 呵梨の成實は

事等□膏 事□膏に等し

法勝の著した『阿毘曇心論』の論理は、(あまりにも煩瑣で)まる

でなおらぬ病いのようだが、呵梨の著した『成實論』の説くことからは、(大乘・小乗を兼ねていて)あたかも萬病にきく仙藥のようだ。「膏」の上か下に一字の脱落があると考えられるので、假にこれになるだろう。小乗の論書である『阿毘曇心論』を排斥し、呵梨跋摩の『成實論』を高く評價しているのである。

ところで、『成實論』をこのように格別に讃仰したのは、梁の簡文帝蕭綱である、その「莊嚴旻法師成實論義疏序」には、次のように述べられている。

毘曇外道をして、二途を皆廢せしめ、如來論主をして、兩理を兼ね興らしめんと欲す。夫の龍樹・馬鳴の若きは、止だ大教を筌するのみにして、旻延・法勝は、小乘に縈縛せらるるのみ。兼ねてこれを總ぶるは、此の説に踰ゆる無し。

題名にいう「莊嚴旻法師」とは、梁朝を代表する成實論師だった僧旻を指す。この序は、僧旻の著『成實論義疏』のために書かれた文章である。『成實論』が、小乗・大乘の教えを總合した優れた論書であり、「龍樹馬鳴」の論書よりも優れていると讃めている。そしてその文脈において、「毘曇外道」「旻延法勝」を排斥している。南朝梁における『成實論』の盛行を良く示す文章である。

趙王招が、梁簡文帝蕭綱の「莊嚴旻法師成實論義疏序」をふまえて「法勝毘曇、義均廢疾」「呵梨成實、事等□膏」と記していることは、疑いようがない。法勝の『阿毘曇心論』を強く排斥し、その對極において呵梨の『成實論』を稱揚するという論の展開は、全く蕭綱の論述と同じである。『成實論』にこのように特別の位置をあたえる考えかたそのものが簡文帝蕭綱と同じであるだけでなく、論の展開のしかた

までが蕭綱と同じなのである。

趙王宇文招は、いつどのようにして梁簡文帝蕭綱の「莊嚴法師成實論義疏序」を読み、學んだのだろうか。しかも先の例からも見るこ
とができるように、宇文招は、蕭綱の他の文章も學んでいたらしい。
趙王が蕭綱の文章をある程度まとまった形で讀み學んでいたとするな
ら、少くともそれを紹介したのは、恐らく庾信だったに違いない。在
梁時代、皇太子だった蕭綱に任せ、その東宮に最も頻煩に出入りして
いた文人は他ならぬ庾信だった。「成實論」の佛教史上の價值は問題
の外に置くとして、いま重要なのは、北周の王族である趙王招が梁の
簡文帝蕭綱の佛教にまつわる文章をまちがいなく讀み影響を受けてい
たこと、そしてその媒介者がほぼまちがいなく庾信だったことである。

こうした事態は、庾信個人に發する影響ではない。しかし、あくま
でも庾信が體現していた南朝文化の影響である。聖武天皇『雜集』は、
いわばそうした影響の種々相を、現在進行形の形で傳えているのであ
る。

そうした例をもう一つ提示しよう。趙王招の佛教思想は多岐にわた
る内容をもつが、そのなかで『華嚴經』への信仰があったと思われる。
「周趙王集」の一「二」平常貴勝唱禮文 a 「法身凝湛」は次のよ
うにはじまっている。

夫法身凝湛 夫れ法身は凝湛にして
似太虚而無際 太虚に似て際り無し
妙理淵深 妙理は淵深にして
同滄海而難測 滄海に同じくして測り難し
但温和拘舍 但だ温和拘舍のみ
普應十方 普く十方に應じ

毘盧遮那 毘盧遮那のみ
遍該萬品 遍く萬品を該む

眞理そのものとしての佛の本體である「法身」について、述べてい
る。それが水のように深く澄みきっていて虚空のように無限であるこ
と、つまりまったくとらえどころがないことが述べられる。妙なる眞
理「妙理」もとらえどころがないので、方便としての說法「温和拘舍」
だけが衆生の求めと理解に應じられる。そのように、「法身」も「毘
盧遮那」佛という姿に現われ出てはじめて、「萬品」(萬物)をつつみ、
その中にそなわることができると述べている。「毘盧遮那」(盧舍那)は『華嚴經』
にえがかれた世界の教主であり、「法身」が衆生の求めに應じて現前
した、諸佛の根源となる佛である。

また一「二」平常貴勝唱禮文」中の c 「無常一理」には、「三寶諸
尊」と並んで「應現法身」に敬禮することが述べられている。「三寶
諸尊」で佛を指しているのに、その上「應現法身」に敬禮すると言
うのは、衆生の求めに應じて世間に現れた、つまり「應現」した「法身」
として、毘盧遮那佛に特別の地位を與えたものと思われる。この他に
も散見する『華嚴經』に關わる記述を見ても、趙王の信仰と理解は相
當に深かったと思われる。

ところで、庾信にも『華嚴經』の理解のあとが見える。庾信の「陝
州弘農郡五張寺經藏碑」は、彼が北周の弘農郡守に任じられていたと
きの作であるが、そこには「七處八會、三清四說、皮紙骨筆、木葉山
花、象負之所未勝、龍藏之所不盡」(七處八會、三清四說、皮紙骨筆、
木葉山花、象負の未だ勝へざる所、龍藏の盡くさざる所なり)との表
現が出てくる。七ヶ所の地で八回の集會をひらいて佛が說法したとい
う「七處八會」の教説は、『華嚴經』の構成そのものである。

また「秦州天水郡麥積崖佛龕銘」には「水聲幽咽、山勢崢嶸。法雲常住、慧日無窮」(水聲は幽咽し、山勢崢嶸たり。法雲は常に住まり、慧日は窮まること無し)と言う。「法雲」は一切のものを蓋う佛法を意味し、『華嚴經』で重視・多用される語であるが、この部分も、『華嚴經』十明品の「興無量法雲、普雨一切甘露法雨」(無量の法雲を興し、普く一切の甘露の法雨を雨らす)等の表現をふまえるだろう。「陝州弘農郡五張寺經藏碑」にも「法雲深藏」という語が出ている。これらの語彙から、少なくとも庾信が『華嚴經』を知り、理解していたことは推測できる。もちろん庾信が熱心に同經だけを信仰していたということではなく、多くの經典・論書を知っていたのだろうが、『華嚴經』の理解もその中で大きな位置を占めていたに違いない。

先に觸れた通り、趙王が庾信の「陝州弘農郡五張寺經藏碑」や「秦州天水郡麥積崖佛龕銘」を良く見ていたことは確かである。従って、趙王招の『華嚴經』への關心は、その一部分は、庾信からの刺激による部分があったと言えよう。それを庾信からの影響とは言えないにしても、趙王が持っていた『華嚴經』理解に様々な刺激をあたえることになったことは推測できる。

北朝の華嚴學は地論師によっておし進められ、南朝の華嚴學は三論學派によって進められたという。その兩者が出會って華嚴の教學が本格化するの、隋の統一以後(五八九年以後)とされている。しかしそれに先だち、もちろん本格的な佛教思想の交流には程遠いが、庾信と趙王招という個性を介して南方の華嚴信仰と北方の華嚴信仰は出會っていた。それが思想史や文化史の表面に現れないとしても、こうした出會いの多數の重なりが、後の華嚴教學の展開の基底になったと考えられる。

おわりに

聖武天皇宸翰『雜集』所收「周趙王集」の初歩的な調査を通じて、庾信から趙王への文學的影響の一部が明らかになったと思われる。北周趙王が庾信の語彙・修辭を學んだ様態が具體的に明瞭になり、「庾信體」を學んだという『周書』等の記載を證明することができたろう。また趙王が庾信の公的な文學を學んだだけでなく、流寓の詩人である庾信の内面的煩悶に關わる詩文にも目を向けていたことが、部分的にはあるが跡付けられた。

さらには、庾信個人に發するというより彼がせおっていた南朝の思想・文化が庾信を介して趙王に波及してゆく場面、趙王の持つ佛教思想と庾信のそれとが接點を持つ場面等も見ることができた。『雜集』所收「趙王集」は、從來埋もれていた文化的接觸の様相の一端を、確かに傳えているのである。

注

- (1) 内藤湖南「聖武天皇宸翰雜集」(『支那學』2・3號) 大正十年。
- (2) 『南都佛教』四一・四二。昭和五十三年。
- (3) 清文堂刊。一九九三年。
- (4) 『周書』卷四十一・庾信傳「世宗(明帝)・高祖(武帝)並雅好文學、信特蒙恩禮。至於趙・滕諸王、周旋款至、有若布衣之交。群公碑誌、多相請託。」
- (5) 『周書』卷十三・趙王招傳「趙僧王招、字豆慮突。幼聰穎、博涉群書、好屬文。學庾信體、詞多輕豔。(中略)招所著文集十卷、行於世。」
- (6) 『雜集』本文については、『正倉院寶物』3(毎日新聞社刊。一九九五

- 年。)を底本として用い、一部異體字は正字に改めた。
- (7) 倪璠注。中華書局刊。一九八〇年
- (8) 底本「折」。小野氏前揚書に従い「折」に改める。
- (9) 底本「姓」。小野氏・合田氏ともに「姓」のままとしているが、「姓」の誤寫と判断する。
- (10) このような表現が全て庾信にだけ見られるわけではない。『初學記』卷一・雲第五に引かれている通り、すでに崔豹『古今注』に、「常有五色之雲氣、金枝玉葉、止於帝上」とある。梁簡文帝「詠雲」詩にも「玉葉散秋影、金風飄紫煙」の句がある。
- (11) 「驚猿」は、『淮南子』卷十六・說山訓の養由基の故事による。「落雁」は、『戰國策』卷五・楚策の更羸の故事による。
- (12) なお、庾信Bの出典「明月山銘」は、庾信の在梁時代の作である。現在の庾信の文集のもとになっているのは滕王逵が編集した二十卷本だが、その序文に、庾信在梁時代の作は「一字無遺」(一字も遺るもの無し)と言っている。にもかかわらず、趙王は庾信在梁時代の作品の一部を良く知っていたことになり、大きな問題をなげかける。
- (13) 『梁簡文帝蕭綱集』卷七。「欲令毘曇外道、二途皆廢、如來論主、兩理兼與。若夫龍樹馬鳴、止荃大教、施延法勝、縈縛小乘。兼而總之、無踰此說。」
- (14) ここでいう「華嚴經」への信仰とは、廣い意味で用いている。同經には、一部を獨立させた單行經が多數あり、ことにその「十地品」を獨立させた『十地經』と、それに基いた論書『十地經論』への信仰と研究は盛んだった。ここでは、それらに對する信仰をも含んでいる。
- (15) 『華嚴經』(大方廣佛華嚴經)には六十卷本と八十卷本があり、前者は東晉・佛馱跋陀羅譯、後者は唐・實叉難陀譯である。當然、趙王が讀み得たのは前者である。ところが、同じ華嚴世界の教主の佛の名を前者は「盧舍那」佛とし、後者は「毘盧遮那」佛としている。趙王がなぜ後者の名を用いたのか、不明である。古い單行經の中にこの佛名を用いているものはあるし、南朝にもこの佛名の現れる經典があるが、それらの相互関係も含めて、今後の検討課題としたい。
- (16) 直接には沈約の「謝齊竟陵王示華嚴・瓔珞啓」に「摩法雲於六合、揚慧日於九天」(法雲を六合に騰び、慧日を九天に揚ぐ)等の表現をふまえているだろう。
- (17) 「法雲」は、また『華嚴經』においては、菩薩の修行の最高位「法雲地」(第十地)を意味する語でもある。同經十地品に「兩甘露法雨、滅諸煩惱火、是故諸如來、名爲法雲地」とある。庾信がこの語をくり返し用いているのは、彼が同經に親しんでいたことを示すと考えられる。
- (18) 地論宗は、世親著『十地經論』を主な講究の對象とする學派であり、東魏・北齊が中心だったが、北周にも及んでいる。三論學派は、龍樹著『中論』『十二門論』及び提婆著『百論』を研究對象とする學派である。江南では重んじられたが、庾信在梁時代にはまだ勢力を持っていなかった。ただ、六十卷本『華嚴經』は東晉で譯されており、江南での同經の信仰と研究は獨自の傳統を持っていた。(魏道儒『中國華嚴宗通史』一九九八年。第三章「諸派融合與華嚴宗創立」)